

研究ノート

博物館館務実習の指導と成果

平賀 明彦

はじめに

科目としての博物館実習は、学内実習、見学実習、館務実習から構成されているが、中でも、2年生の夏期休暇中に実施する館務実習は、学芸員の資格取得のための講座の集大成として位置づけ、受講生に対してもそのような心構えを持つよう事前指導等とくに強調している。すでに他の機会に触れたように、1年次から2年次の前半にかけて数度行っている見学実習では、性格の異なる多様な博物館を訪れ、それぞれのテーマに即した資料収集やディスプレイの工夫がどのようになされているかについて実地に観察し理解するとともに、館内部の様子や学芸員の活動内容について、できる限り仔細に当該館の学芸員から説明を聞く機会を設けている。博物館学などの講義科目や学内実習などで身につけた学芸員の役割や活動についての知識を、実際に個々の博物館の現場で、それぞれの館の実情に即してどのような様相であるかを実地に検分し、理解することが重要だと考えるからである。館務実習への地均しとしても重要な体験だと言える。見学実習ごとに必ずレポートを課し、何を発見し理解したかをまとめるよう指導しているが、そこでは、多くの学生が、裏方としての学芸員の、今までほとんど知らなかった仕事や苦勞について言及しており、とくに資料収集や公開展示の企画案づくりから始まって、その予算計画、そして実際の資料収集、展示作業での細部への気遣い、とりわけ相当な部分まで手作業で一つ一つを作り上げていく道筋などについては一様に驚きをもって、認識をあらたにしたと書き記す場合が多い。そういった意味でも、この数度の見学実習は、館務実習に向けてのモチベーションを

高める効果を果たしていると言える。

また、これら見学実習の回数を重ねることによって、一つ一つの博物館が、掲げているテーマやその規模、あるいはおかれた立地条件等によって、学芸員の役割や仕事内容に相当ヴァリエーションがあることを理解させ、自らが予定している館務実習館について、事前にどのような点を知識として持っておくべきかを考える参考にもなっている。見学実習の事後指導や館務実習の事前指導を通して、それぞれの館についての下調べと、その特徴把握にとくに力を入れるよう指導しているのはそのような理由からでもある。

実習館決定のプロセスや事前指導の在り方、実習日数などについてはすでに別稿で触れておいたので、ここでは、代表的な館をサンプル事例として取り上げ、学生たちの実習記録によりながら、実習プログラムの特徴や担当学芸員の指導の様子、実習生の実習態度などについて具体的に検証し、博物館実習の集大成としての館務実習がどのような成果をあげているのかを検討してみよう。

複合文化施設での実習

1987年に多摩ニュータウンの中心、多摩センター駅のほど近くに開館したパルテノン多摩は、正式名称を多摩市立複合文化施設という。パルテノン多摩は市民から募集して命名された愛称である。新都市建設を目指して進められた多摩ニュータウン計画の一環として、文化活動を通じ、市民がふれあうまちづくりの拠点として建設された。中心となる大・小の市民ホールでは、コンサートはもとより、演劇、オペラ、バレエなどの多目的なイベントを開催することができ、また市民ギャラリー

などの場としても活用することができる。そしてさらに、自然や歴史・民俗、科学に関する市民への情報発信の機能も兼ね備えた複合的施設であるが、その博物館としての機能は、大きく3つの展示スペースによって構成されている。

自動演奏楽器の展示と実際の演奏会を目的に作られたマジックサウンドルームは、19世紀から20世紀初めに作られた自動演奏楽器8台を展示し、その仕組みをわかりやすく解説するとともに、そういった楽器がもてはやされた時代の文化的背景を理解することができるようにディスプレイを工夫している。また、定期的な演奏会も行っている。

サイエント・アートをテーマに掲げたミラクルラボは、遊びを通して科学の楽しさを知ることを目的に設けられた展示場で、主要には子どもをターゲットにしているが、大人もあらためて科学の原理や法則を再認識できるような仕組みになっている。触れて確かめて実験できる科学器具が20台ほど置かれていて、常駐の展示解説員が使い方やその仕組みについて解説をしている。また、それぞれの器具は、科学者と美術家が協力しながら製作したもので、デザイン的な美しさでも興味を引き、触ってみたいくなるような優しさをもっている。

大規模開発によって建設が進められたこの地域の変貌の様子を展示資料によって示したのが歴史ミュージアムで、ここでは、多摩丘陵の歴史を丁寧に進めながら、近代化の道筋、そして開発へのプロセスを、ビジュアル装置やジオラマなどによって解りやすく解説している。

ここでの実習は、これらの博物館機能をもった展示室を中心に行われ、実習生は、一般の郷土資料館や個人の業績を顕彰した博物館とは異なった環境の中で、特色のある実地研修を積むことになる。ほぼ毎年のように実習生受け入れを依頼しているが、ここでは1992年の事例によりながら館務実習の内容を検証しておこう。

実習期間は8月の最終週で7日間の短い期間であったが、下表のように密度の濃い内容であった。多目的の複合文化施設の特徴に沿った実習が行われている様子がよくわかるが、実習生はこれまでの学内実習等で学んだ内容と異なる部分もあり、とまどいもあったのではないだろうか。そのような点も含め、以下、実習生Yの実習日誌を手がかりに、その経過を追ってみよう（以下、とくに断らない限り引用は学生の実習日誌から）。

	実 習 内 容 （ 午 前 ）	実 習 内 容 （ 午 後 ）
8月26日	ガイダンス・全体施設見学	常設展示室、ミラクルラボ、マジックサウンドルームなどの見学
27日	講義「郷土博物館の役割を考える」	午前の講義を受け、多摩ニュータウンの新旧の建造物などを見学
28日	ミラクルラボ及び収蔵庫の見学とその役割、問題点等について検討	電子顕微鏡などの取り扱いなどの実習
29日	写真機の歴史や種類、構造についての講義及び撮影作業の補助	撮影実習
30日	展示品梱包の実習	「音具ワークショップ」の準備作業、音具製作及び受付
31日	市民ギャラリーでのイベント「人と自然のダイアログ」の準備作業	イベント見学
9月1日	講義「イベント企画作成について」	講義「外国の博物館と日本の博物館の比較検討」・実習全体のまとめ・講評

初日の施設見学、展示室見学では多摩の自然を再現したジオラマが興味を惹いたようで、「常設展示のジオラマのメリットとデメリットなど、展示方法についての問題点にふれることもでき、大変勉強になった」と記されている。常設展示室の最後の一角を占めるこのジオラマは、開発以前の多摩の里山の景観を非常に見事に映し出したものであり、生態系だけでなく、下草刈りなど林の恵みと周辺の人々の生活の関わりを丁寧な解説にあわせたライトアップの変化でわかりやすく提示するもので、視角に訴えた説得力のある展示になっている。しかし、しっかりした内容の大きかりなセットになっているため、設定の更新や作り直しなどが難しく、リピーターへのアピールなどの点で問題があることなどが紹介されたのであろう。実習生にこういった展示物の功罪を考えさせる良いきっかけを与えていることがわかる。

2日目の講義も、研修室でのレクチャーではなく、展示施設を生かした内容になっていた。日誌には「あらかじめテーマを与えてもらい、2時間、常設展示室を見学しながら『郷土とは何か』、『郷土博物館の目的』、『分かりやすい展示』について自分達の考えを発表。その後、特に郷土博物館の対象となる「郷土」の範囲の不確かさ、行政区でわけられない範囲についての講義を受ける」とある。博物館にとって重要な意味を持つ「郷土」という概念について、実際の展示内容から個々の実習生に考えさせる興味深い指導であったことがわかる。その上で、午後にはさらに、館外に出て多摩ニュータウンの新旧の施設を見学し、郷土の移り変わりという問題について実際の動きを肌で感じながら考えさせる指導が行われていた。日誌では「多摩丘陵の中での生活形態の変化、開発前と後の変化、町の景観から色々なことを学べることを知」ったと記されていた。そして、2日目全体の感想でも、「郷土博物館の郷土の対象が様々な形でわけられることを知った。ということは、展示内容も多種多様の切り口で行われるべきだということだ。町の景観をとってみてもそこから学ぶ

ことは様々である。多摩ニュータウンというある種特殊な地域だから歴史を感じるということもあるだろうが、それだけではないと思う。常に何事も多面的にみるのが学芸員に必要なだとしみじみ感じた」という形で、「郷土」というキーワードを軸に、町の移り変わり、景観の変化を捉えて地域の歴史を提示していくことの意味と、そういったことでの博物館の役割について学習できたことが良くわかる。具体的な展示内容と、実際の町の景観の変化を題材に、実習生一人一人が考えを煮詰めていく形で指導が行われたことにより、確かな学習成果が得られていることが読みとれる。

3日目は、ミラクルラボでの実習であった。ここは、デザイン的に工夫された科学的実験器具を使って、楽しみながら科学の基礎を学んでいくことをコンセプトにした部屋である。実験器具の操作の実習は、「顕微鏡の使用などは久しくしていなかったもので、操作にとまどってしまった」が、「普段触れる機会の少ない電子顕微鏡の実習は大変良かった」という具合に自らがそういった実験器具を取り扱うことに興味を覚え、その結果「人が足を運ぶ展示を心がける姿勢の重要性を改めて知っ」ていくことになるのである。これも実際の体験から、博物館展示の一つの重要なポイントを修得した好例と言えるだろう。

4日目は写真撮影の補助と実際に撮影を行う実習であった。写真の歴史、構造、取り扱いのレクチャーを受けた後、展示物の撮影準備、ライトのセットなどの補助を行い、午後には実習生自らが収蔵物の撮影を行った。写真撮影が「資料の保存、展示の記録としてかかせない重要な学芸員の仕事の一つだということであらためて知」ることになり、とくにカタログの基本として写真による記録保存がいかに重要かを確認することができただろう。

5日目には収蔵品の梱包作業を実習したが、「模様がえの際に壺の梱包をする機会があった。短大の授業の中でやったはずなのに、全くできなかったのが情けなかった」と慨嘆する。これも学

内で学ぶ場合と現場で対処しなければならない場合とのギャップを体感した良い実習成果と言える。

音具ワークショップの準備作業の後、6日目は『人と自然のダイアログ』というイベント企画の準備作業を補助した。「うみ・そら・さんごのいっただえ」の映画上映と椎名誠＋中村征夫 による「フィルムと自然への熱い想い」と題するトークショー、そして、市民ギャラリーでは「椎名誠＋中村征夫 ジョイント写真展」を同時に開催するという大規模企画。これらの各パートで裏方として下ごしらえに係わり、合間を映写技術の講習などを受けるハードな実習内容であった。これらを通して、学芸員の仕事とは思ってもいなかったことを手がけなければならない実情を知り、「企画から同時開催の写真展の準備や進行、片付けに至るまで学芸員は多岐にわたって大変な仕事」であることを改めて実感することになる。多目的な複合施設での実習の特徴とも言えるだろう。学芸員のコメントもその点に注意を喚起するように、「通常の学芸員の仕事とは違った実習でしたが、逆にいえば、これだけバラエティに富んだ実習をこなしている実習生も、いないのではないのでしょうか。今後ますます増えるであろうこの種の施設では、今よりもっと変化に対応する力が必要になってきます。頭を柔軟に、何でも楽しむぐらいの気分でがんばりましょう」と締めくくられていた。

7日間という短い期間の中に、凝縮した内容物が盛り込まれた充実した実習であり、とくに複合施設としての同館の特徴を十二分に生かしており、実習生にとっては、古典的な博物館イメージを転換する良い機会になったことだろう。今後、地域博物館がこのような機能を果たしていく可能性はより強まっていくことを考える時、博物館学や学内での実習指導にもこういった要素を取り入れていくことが重要だろう。

埋蔵文化財資料館での実習

ここでは考古遺跡・遺物を中心に収集・展示している博物館の典型例として東京都埋蔵文化財

センターでの実習を取り上げる。東京都埋蔵文化財センターは、1985年、多摩ニュータウンの開発事業にともなって調査・発掘された土器や石器類の出土遺物を収蔵する目的で設立されたが、以後、展示スペースを充実し、埋蔵文化財資料の一般公開にも努めている。また、隣接した屋外に「縄文の村」の再現スペースを持ち、NO.57 遺跡（縄文時代集落）を盛り土して景観を復元、トチやクルミ、クリなどの樹木やゼンマイ、ワラビなどの植生を再現し、また、畑ではアワ・キビ・ヒエなどの栽培も行っている。園内には3棟の復元住居もあり、一般公開している。ここでも毎年のように実習を行っているが、以下では、1994年の実習生Ⅰの日記によりながらその経過を追ってみよう。

7月25日～8月5日までの10日間の実習期間の初日はガイダンスで、施設の見学と博物館学全般及び埋蔵文化財収蔵館としての同館の特徴などについて説明を受けた。2日目から4日目までは発掘作業で、残りの期間は、保存科学の実地研修と市民向けの土器づくり講座のアシストであった。

学内実習では考古遺跡の発掘・保存まではとても内容に組み込めないのが、実習生にとっては初体験であり、最初はとまどいと不安があったようだが、学芸員や現地のスタッフの丁寧な指導と実際の作業のおもしろさに、次第に興味が湧き、取り組み姿勢にも積極性が出てきた。実習内容は発掘作業の補助で、センターから30分ほど離れたNo210 遺跡で行われた。

「ここは、炉穴と思われるもので、まず、水系で仕切り、市松模様で掘った。対角線上の相手の深さを見ながら自分の場所の地層が変わる所を見て掘らなければならなかったのが大変苦労した」、あるいは「発掘は学校でも習わなかったのが、実測をする、といわれたときは、かなり緊張してしまい、思わぬ失敗もしてしま」ったり、「今日も実測からであったので、やはりびくびくしていました」といった表現が日記に散見された。しかし、担当学芸員の適切な指導で、その作業の意味と方法が理解できてくるにつれて、相当しっかりした

内容について記録に残すことができるようになった。例えば、2日目の日誌には、「今日は section B~B' と C~C' の測量から行った。水平に張った水系の上にメジャーを張り、コンベックスと錘球を使って測量し、まず B~B' を終了させた。C~C' はトランシットとスタッフを使って 13cm に基準を設定し、水系を張った。それから、B~B' と同じ工程を行って測量を終了させた。その後、すべての水系とポールをはずして、市松模様だった炉穴を円形にして完成させた」とある。そして「昼過ぎは、炉穴の平面図の描きおこしに移った。grid に水系をひっかけて張り、4m 四方のマスを作り、さらに 1m ずつに仕切って方眼を作った。この際、傾斜で誤差が出るので、うまく分割して均等に割った。その後、このマスを基準にしてコンベックスと錘球で測り、図面に書きおこしていった」というように作業の細部にわたってしっかりした記録が綴られている。昼休みにも「特別講義」をする担当学芸員の熱心な指導の賜物と言えるだろう。その結果、「発掘調査がすべて終了してしまい、残念なような、うれしいような気分です。この3日間、とても充実していて、かなり専門用語も覚え、又測量方法も学ぶことができ、自分なりに頑張った、と思っています。はじめて手にするものが多く、驚きや感動の3日間でした。日に焼けた分だけ収穫があったと思います」という感想が引き出されることになるのである。

5日目からは金属器や木器の保存方法とその実際の処理、それと縄文土器づくり講座の準備に取りかかった。埋蔵文化財資料館にとって保存科学は必須であり、実習生もその知識と体験を通して資料保存の重要性を体得することになる。保存薬品の種類や取り扱い方の指導を受けた後、金属器の目録作成、木器の入っている真空パックの穴あけ、PEG（ポリエチレングリコール）の入れかえなどの作業を実際に行っていた。また、併行して土器造りのための準備作業を行い、遺跡から掘り出した粘土に一定量の砂を混ぜて、土器の素材づくりを手がけた。市民参加の土器づくり教室は

盛況で、実習生も自ら製作しつつ、小学生をはじめ一般の参加者の作業の補助もするのがなかなか大変だったようで、「小学生くらいの子に実習生全員“先生”と呼ばれ、嬉しかった反面、うまく指導できなくて残念でした」と記している。しかし、参加者「皆さんの顔が生き生きとしていたのが印象的でした」とあるように、こういった企画の楽しさと意義にも気付くことができたのは収穫と言えよう。館務実習は夏期休暇中に集中しており、地域博物館の多くがこういった形での市民参加のイベントを企画しており、実習生もそのスタッフの一員として指導的役割のサポートをすることが多いが、これらも学芸員の業務の幅の広さを体験する良い機会と言えるだろう。

この館務実習では、発掘＝埋蔵文化財の収集と、それら収集物の保存・分類、さらには一般への公開及び埋蔵文化財に対する情報発信と啓蒙活動という、埋蔵文化財を取り扱うこの館の基本業務のすべてに触れ、また実習生が自らそれを体験しながら学んでいくことができるプログラムが用意されていた。学内実習では十分に学習できなかった専門性の高い分野に関しても、担当学芸員の丁寧な指導で一定のレベルの仕事を行なうことが可能となり、そういった経験を積むことによって、このような施設が果たしている役割の一端を学ぶことができたと考えられる。

地域の郷土博物館での実習①

ここではその典型例として近接市域でもある武蔵村山郷土資料館での実習を取り上げる。地域の歴史や民俗に関わる資料の収集、保存、展示公開を行う典型的な郷土資料館で、狹山丘陵の麓に位置する近代的な建物の同館は、自然コーナー、歴史コーナー、民俗コーナーに分かれており、また年数回、テーマごとの特別展を開催している。短大隣接地域でもあり、同市出身者が多いので、やはり毎年のように実習生を送っているが、ここでは1994年8月2日から14日までの12日間（8月8日は休館日）の実習の模様を実習生Kの日誌を

もとに振り返ってみる。この年は夏休みにあわせて、特別展示として「村山を通った軽便鉄道」が企画された。

実習初日はガイダンスで、市の社会教育課に赴き実習の趣旨について説明をうけた後、資料館に戻り、文化財系の業務内容、郷土資料館の役割、事業の解説と館内の見学を行い、収蔵庫や展示スペースの構造について説明を受けた。

その後、まず最初に取り組んだ作業は、夏休みの子ども向けイベントとして企画された昆虫標本展示の準備作業であった。蝶や蛾、甲虫の標本をもとに、昆虫名をワープロで打ちだし、種類別に整理する。さらに、図鑑などで昆虫の特徴を調べ、展示に必要な説明書きの下準部のための情報収集を行った。「今日一日だけでも、博物館の仕事は開館の準備から、文化財に関する管理や調査等、本当に幅が広いことを感じました」とあり、最初から博物館業務の多様性に驚かされた率直な感想だろう。とくに、学内実習では自然科学的な分野にはほとんど触れることができないので、昆虫標本の製作などはかなりプレッシャーを感じたはずである。学芸員の日誌に対するコメントには「学芸員は雑芸員といわれるくらい中小規模館では何でも行うよう」になってしまう実情が指摘され、「当初は『何でこんな事まで』と思いますが、今回の実習ではできるだけ多くのことを経験してもらおうと思います」と書かれていた。2日目からは、昆虫標本展示の準備作業とともに、歴史コーナーの特別展のための準備が併行して進められた。いわゆる展示替えの作業を学芸員の指示のもとにこなすことになる。収蔵庫を整理し、これまでの展示物を格納し、特別展のためのスペースを確保する作業から始められたが、その際、収蔵庫内の民具や発掘文化財などのカタログづくりも同時に進められ、その作業を通して、地域の考古遺跡や民俗学的視点からの地域の特徴が解説された。収蔵庫内には、「鍬や、江戸時代の石ウスなどがたくさん見られ、また、それについてのお話も色々とうかがわせていただき、学んだと同時に、学芸

員は、考古学、民俗学などあらゆる方面のことを知らない、つとまらないということを感じました」とあったように、高度の専門性とともな多角的な視野とその裏付けとなる幅広い知見が学芸員の仕事に必須であることが実感されたようである。石臼などに興味を引かれ、解説に聞き入った実習生Kに対し、「一つの「物」(資料)に対しての思い入れは館運営などに新しい展開をもたらしてくれることもあります」とのコメントが付されており、収蔵物に対する興味・関心が展示企画などに生きてくることが指摘されており有益であった。

3日目は昆虫標本展示の仕上げとして、標本一つ一つの説明書きをこなした。「説明書きのパネルの内容を考えるのが本当に苦労しました。100字程度で小学生にわかるようなものを作るのは、簡単そうに思えて、なかなかまとまりませんでした。情報をたくさん取り込むよりも、どこに要点をしぼり、どの部分をけずっていくかを考える方がずっと大変なことだとわかりました。ちょっとした展示でもこんなにやることがあり苦労する部分があるのだなと思いました」と作業に対する感想が綴られていたが、まさに実習のポイントを良く押さえた実りある経験であったことがうかがえる。「こうしたパネルの原稿文も訓練が必要になります。対象者によっても内容が変わるため難しい作業です」という学芸員のコメントも実に適切であった。

併行して行われた特別展準備では、手作りでのパネル製作が主要な内容であった。説明パネルの地図を色鉛筆で色分けしたり、カッターで写真の縁取りをしてパネルに添付したりと、まさに細々した作業をこなしていった。自ら手がけたこれらの作業について「手作りというのは、作る側の温か味が相手に伝わるものだと思うし、見ていて、作る側の伝えたいことがおのずと出てくると、今日の作業をしていて感じました」という感想を持たれたことは、学芸員の仕事の基本的な部分に関わるだけに大きな収穫と言えるだろう。

昆虫標本展示の作業でも次のような感想が実習

の成果を非常に良く示していた。「実際に自分達で企画をし、作っていく作業はとても苦勞しましたが、とても良い経験になりました。この展示は小学生が対象なので特にそれを意識し、説明の内容、文体、それにタイトルを工夫してみたり、イラストを描いて色を塗ってみたり、色々考えました。小さな展示でも、実際やってみると、こんなにも工夫を重ねていかなければならないことがよくわかりました」、あるいは、「昆虫の標本整理から始まり、パネルを作り、展示、そして今日のパンフレット作りの段階になってくると段々、自分の手で何かを作り出すことが楽しくなってきました。自分なりに、小学生向けの展示を作る時の注意すべき点などもわかってきたと思います。文章の易しさ、展示する高さなど、また、どうしたら小学生が展示に興味を示してくれるかと考え、その結果、昆虫の絵を書いて色えんぴつで塗ってみたり、とはじめのころに比べると色々、細かい事に気付くことができるようになってきたと思いました」といった作業後の感想には、対象者の目線で展示内容、ディスプレイ方法を工夫することの大切さを経験から導き出している様子が見ええる。どのような層をターゲットに、何を伝達するのかという博物館展示の基本を、この企画を自ら手がけることで会得していったと言える。

典型的な郷土博物館で、展示替えのための、手作りの、細々した作業を積み上げていくことによって、地域の人々に密着しながら、地域の自然や歴史・民俗を伝える役割で何が重要かを理解し、実践するノウハウをつかむことができたことが、この実習の大きな成果であった。「ふだんの仕事は『雑芸員』でも、やはりできあがった展示を見ると『学芸員』としての実感がわいてくる」という日誌最終章の述懐はそのことを良く示している。その過程での学芸員の指導やサジェスションも実に適切であり、例えば、「照明方法もいろいろな方法があります。最近は自然光を採り入れる館が多くなったようです。私自身も館全体が暗く、パネル及び実物(展示)資料にスポットを当てる方

法よりも全体が明るい方が良いと思います」といった指摘は、展示スペースの仕上げ段階で実習生には大きなヒントになったことだろう。「小展示であっても自分達で作成した展示を仕上げてもらい、体験してもら」うことを目指して、「企画、立案、準備、展示と一つの仕事ができあがった時の喜びは大きいものがある」ことを実感させることによって、展示企画の基本を自ら体得できるようにプランニングされた良質の実習プログラムであったと言える。

地域の郷土博物館での実習②

郷土博物館での実習事例として、もう一つ、練馬区郷土資料室の事例を実習生Sの日誌をもとに記録しておこう。石神井公園脇の区立図書館の一部にあるこの郷土資料室は、1970年の開室。展示スペースも小さく、立地にも恵まれておらず、博物館としての機能を十分に果たせるだけの規模を持っていないが、地域の歴史・民俗に関する資料の収集・保存を基本に、充実した展示公開を目指して蓄積を進めている資料室である。都市化が著しい地域の特徴に関わって、昔ながらの練馬の様子を留めておくことを目標に、埋蔵文化財や民具類、あるいは石造物、古文書、地図などを収集・保存するとともに展示し、また、郷土資料集として発行する活動を行っている。ここで取り上げる実習は、1994年8月30日から9月11日まで12日間（9月5日は休館）行われ、民具の調査、整理を中心に、拓本、記録写真の撮影など郷土資料館の基本的な業務がプログラムされていた点で、代表的な事例と言えるだろう。

練馬区郷土資料室では2人の学芸員と数人の嘱託職員が運営に当たっており、実習指導もこのスタッフによって行われた。初日は、6人の実習生の自己紹介、実習日程の確認、館の役割、学芸員の仕事についてのガイダンスではじまり、午後からは民具整理の作業手順の説明などが行われた。2日目から実際の民具整理の作業に入ったが、「道具をリストどおりにならべず法をとり、汚れ

を落し、今度出版する本に載せるものについては写真を取る手伝いをするといった作業を進めていった。実習生Sは大工、鍛冶、桶職、石工、手細工職、屋根職が使った道具を整理したが、一つ一つについてその用法や使用目的について丁寧な解説があったという。そのため「道具に関してはかなり詳しくなることができ」、「昔の人の知恵に直接触れる度、感心させられ」、同時に今と比較してそれらが、「時間の流れ、機械化のはやさを物語っている」と感じられたという。資料一点ずつに驚きと興味を持ち作業を進めることは、それを伝える役割である学芸員にとっては、まず初発の大切な経験であり、指導学芸員がそれを丁寧に引き出していることがわかる。3日目も同様の作業。手順が飲み込めたのだろう、はかどりが良く、多様な民具の調査・整理をこなしている。「水車業関係（水車歯車7つ、水車杵2つ、石臼2つ）、鍛冶関係（ふいご、万力）、繊維業関係（綿、絹糸、麻糸、めくらじま）、染色用具関係（藍ふるい、藍玉、藍がめ2つ、布とめ具、伸子、布どめ具）、製糸用具関係（みこぼうき、糸巻き杵8つ、絹繰り器2つ、管巻き器2つ、座繰器4つ、ふわり、足踏み糸繰器2つ、糸あげ車、揚杵、揚杵受け）、機職用具（高機、ボタン、綜統、おさ2本、杼2つ、伸子、はたくさ）の場所確認、計測、清掃し、撮影をする順番にならべ」ということで、多種多様なものを取り扱い、カタログ化している様子がわかる。「同じ作業の2日目ということでもかなりなれ、作業もスムーズに行うことが出来」とあるように、1日で相当数の調査・整理をこなしている。以後4日目までこの作業は続けられるが、さらに、「屋根職（鉤針）、石工（飛矢2つ、こやすけ、ビシャン、たたき、とんば、こべら、火バサミ）、桶職（割鉈、野引、内丸鉋、外丸鉋、内銑、外銑、正直台、外回し鉋、竹銑、木槌、内丸のみ、三ッ又錐）」、「醸造業（かき桶、手桶、ボウダメ、半切桶、桶、樽、搔棒、ひしゃく、湯桶、さるぼう、ジョウゴ、櫓、銑、社名看板、社名印）」などを取り扱い、それ

ぞれの用途などについて教えを受け、また調べることによって「昔使っていた道具を実際目で見、手で触れた事は貴重な体験とな」と記しているように、興味をもって作業をこなすことができたようである。郷土資料室では、この民具調査のために下図のようなカードを用いている。写真欄

自製品		購入品		不明
製作者		購入の 時 間		
製作法		購入先		
製作量 時 間		価 格		
分布・由来				
採集経過				
提供者	氏名	住所	電話	
保管者	氏名	住所	電話	
備 考				

あるいは使用法の枠内には簡単な図とともに実測寸法を書き入れることにもしている。これらが民具1点1点の個票となり、また一覧表あるいは資料集などの基礎票ともなる。博物館業務のもっとも基本的な部分についてみっちり実習で鍛えられたことになる。

このカード整理と併行して、写真撮影の技術指導が行われていた。整理カードに添付する民具の写真を撮る必要があったため、学内実習でも基本的なことは押さえているが、やはり実践となるととまどいがあったようである。「印刷の三原色、フィルター、色温度変換フィルター、色補正フィルターなどの説明を受け美術館・博物館で使う写真・印刷に求められる物の条件」などについてレクチャーを受けることから始まったが、「午前中の写真の説明はとにかく難しいものでした。話は

科学的なことが多く、朝からかなり頭を使い疲れてしまいました」とあったように、なかなかハードな実習内容だったようである。次いで「ピントにしぼりの説明からはじまり、解像力、被写体をうかすためのしぼりの話をきき、実際に資料室内でいろいろなカメラを見せてもらいました。(ガラスで反射した影の影響を小さくするための偏光フィルター付きのカメラなど、その他二点ほど)」というように、カメラの種類、構造と撮影方法を学んだ。その上で、次には実際に撮影を行い、現像に挑戦することになる。「フィルムを現像タンクに(フィルムを)まいて入れ現像液に6分間漬け、はじめの1分間は攪拌をおこない、次に静止液に30秒間漬け最後に定着液に10分間漬け、水洗いをします。10分間は流しながら洗い、その後しばらく漬け、最後に水切り剤に漬け、フィルムをほしました」。さらに次は焼き付けである。「はじめの30分で現像液などの説明をうけ細かい作業の説明は実際に行いながらうけました。焼き付けは機械に昨日撮ったフィルムを入れ、光をあてピントと大きさをきめ光の量をみて焼き付ける時間を決めます。(大体2〜3秒が多かったです)それから紙をあて焼き付け、現像液に1分浸した後、静止液に30秒浸し、定着液に5分浸け水でながし洗いをします」と記録されている。一人で20枚程度を焼き付け、おおむね成功したようである。写真撮影はともかく、現像・焼き付けとなると実習生にはなかなかなじみのない領域で、おそらく初めての体験であったと思われるが、学芸員の指導は非常に丁寧であり、手順だけでなく写真が画像として印画紙に定着し浮かび上がってくるしくみから理解させることに意を用いていることがわかる。写真撮影は民具調査カードの作成にとって欠かせない要素であり、収蔵品の整理にとってもっとも基本的な作業でもあるため、実習の中心的課題として位置づけられていることがうかがえる。そしてそのように時間と手間をかけた指導は、「カメラをはじめて持った時は一体どうなるかととても不安でしたが、丁寧な指導のおかげでなん

とか写真の形にすることが出来ました。実際、自分で焼付けを行った事、またカラーとはひと味もふた味も違った良さを持つ白黒写真ということで出来あがったものに愛着を感じました」という成果を生んでいた。最終的に、実習生が撮影・現像・焼き付けを行った作品をパネル化し、展示物に仕上げたが、「実習最後に自分で撮った写真をパネル化することができ、感激しました」という感想が残ることになった。所定の実習プログラムをこなしたというだけでなく、習得した技術を用いた成果物を手にすることで、より大きな達成感を獲得した様子がよくわかり、その点で充実した成果をあげた館務実習指導の好例と言えるだろう。

まとめにかえて

以上のようにいずれの館の場合も、それぞれの館の特色を生かした実習プログラムが用意され、それに沿って学芸員が丁寧な指導を行い、相当の実習成果をあげていることが明らかとなった。ここでは十分触れられなかったが、日々の日誌に学芸員が記載するコメントは適切であり、慣れない作業にとまどう実習生を時には励まし、気持ちを引き立たせながら、しかし、重要ポイントに関しては厳しく叱咤することも忘れない、簡潔ながらも的確な指摘が多かった。実習生の行動記録からも学芸員の指導の熱心さ、丁寧さとともにその的確さが伝わってくる場合が多く、それが実習成果に直接結びついていることは明らかであった。それらから多くを学びながら、学内実習など館務実習以前の学生指導にも生かしていく必要があるだろう。その点については、また稿をあらためて検討を加えることとしたい。